

# 四国農学連報

第 27 号

発 行 者 校 盟  
四 国 地 区 農 業 大 学 校 生 自 治 会  
編 集 大 学 校 会  
愛 媛 県 立 農 業 大 学 校 生 自 治 会

## 二年間で学んだこと

四国地区農業大学校学生連盟会長  
愛媛県立農業大学校学生自治会長

廣 見 大 地



私は、昨年の二月に自治会長に選ばれましたが、新型コロナウイルスの影響で

学校生活が遅れたこともあり五月下旬から自治会長としての活動が始まりました。当初は人前で話すことが苦手だったこともあり、自分に務まるか不安で、話す機会が訪れるたびに胃が痛くなるような思いでしたが、自治会の仲間やおおらかな学友たちの支えもあつて徐々に克服していくことができました。さらに今年度は愛媛県が四国農学連の当番県であり、新型コロナウイルスにより例年とは違う状況に、不安と責任感で辞めたいと思うこともありましたが、そのたびに学校の先生方や自治会役員に支えられ、意見発表会

等の行事を無事に終えることができませんでした。自治会の仕事は一人ではできません。お互いに意見を出し合い、協力することで一つの組織として成り立っていることを感じました。

また今年度は、農大の年間行事の中でも目玉といえる十一月の「収穫祭」も、毎年多くの方が来場され混雑が予想されることから、残念ながら中止せざるをえませんでした。しかし、愛媛農大はただでは終わりません。十一月を「直売市強化月間」として位置づけ、本来収穫祭で販売する予定だった農産物を直売所で販売することとしました。学生自治会で看板やチラシのデザインを一から考え制作し、宣伝に力を入れたところ、多くのお客様に学生一同が栽培管理してきた作物を手にとってもらうことができました。準備の段階では、普段実習では見せない学友の顔や意外な特技を知ることでもできました。

私は、農業大学校卒業後は、アグリビジネス科に進学し、現在も進行中の作業の省力化に向けた研究を引き続き

行いたいと思っています。校外実習や農家でのバイトを通して体力のない私にはもつとコンパクトに楽に行える方法はないかと考えるようになりました。私の考えはよく甘えだと言われますが、作業の省力化や効率化を考えることは技術の発展に繋がると考えています。アグリビジネス科卒業後は、農業法人に就職しプロジェクト活動で研究したことを活かして実戦での経験を積んでいきたいと思っています。

しかし、これはあくまで通過点にすぎません。私の最終目標は、独立し観光農園を行い、地域振興に貢献したいと思っています。今年の先進農家研修の際お世話になった農家さんから「昔はこの山一面が立派なみかん畑だった。みんな辞めていってしまった。」という話を聞き、非力な自分でも何か力になりたいと思うようになりました。

近年では、都会から田舎に、安らぎを求めて移住して来る人が増えているので、そういった人々をターゲットに愛媛の魅力を伝え、また、農業に興味を持ってもらえるように魅力を伝えられる農業経営者になりたいと思います。

私が愛媛農大で学んだことは、将来必ず糧になると信じています。私の家は非農家で、高校も普通科で、農業のことなど何も知らずただ興味があるという状態で農大での生活が始まり、知識も技術も用語も何も分からないまま

実習を行いました。今の自分と当時の自分を比べてみると確実に成長していると実感しています。また、校外実習や先進農家研修、北海道実習等では、農家さん独自の経営方針や農業に対する心構え、就農後の苦労話等を聞き、今学習していることがいかに役に立つのかということを感じました。さらに、農大で知り合った友人の家にみかんの収穫のアルバイトに行き農繁期の忙しさを体験し、今の自分の作業精度や速さを知り、足りないものを把握することにもつながりました。

最後に自治会長という責任ある立場になってみて今までは違う視点や人とのつながりを感じることができました。まだまだ未熟ではありますが成長できたと思います。この経験を活かして今後更に成長していきたいと思えます。



果樹専攻の仲間たちと

# 農業や農村の未来は君たちの手で！

愛媛県立農業大学校 校長 久保田 誠



令和二年度は、新型コロナウイルスに振り回された年だ。全国の農大も同様だと思

うが、愛媛農大では、入学式は開催できず、学校が再開されたのがゴールデンウィーク明けの五月八日から、また対面授業の開始も六月にずれ込んだ。そして、本農大の一大イベントの北海道農業実習や秋の収穫祭も中止となった。また学生が楽しみにしていた四国農学連のスポーツ大会も開催できず、その他各種の行事も中止やリモート開催となった。

ともかく、令和二年度は今までに経験がないイレギュラーな対応が求められた。一般社会においてもマスク、手指の消毒、ソーシャルディスタンスが日常化し、東京や大阪等の都市部をはじめ県外への出張や懇親会が自粛され、

人々の行動が変容した。

「三密回避!」、「新しい生活様式!」、「Withコロナ!」・・・経済アクセルと感染防止ブレーキが同時に進められる中で、足元の学校では、学生や教職員に「新型コロナウイルスを学校へ持ち込まない、寮へ持ち込まない」ことをスローガンにマスク、手洗い、うがい、部屋の換気を強く指導し、協力を要請した。学生に不自由な対応を強いるのは申し訳ないが、何とか学校運営を継続していくためにはやむを得ない措置だ。

こうした落ち着かない中ではあるが、一〇年、二〇年、三〇年といった少し長いスパンで農業や農村について考えてみたい。

私が気になる項目は、①気候変動、②人口減少、③グローバル化、④技術革新の四つ。中でも、農大で学ぶ学生にとっては、そのほとんどが、就農（自営、農業法人就職）はもとより、農業機械や資材、種苗など農業を支え

る関連産業へ就職し、地域の重要な担い手となっていることを考えると、①気候変動による栽培や飼養環境の変化、②少子高齢化等による農村地域の急激な人口減少への対応は避けては通れない。

まず、気候変動についてはどうだろう？気象庁が今年発表した「日本の気候変動二〇二〇」によれば、二十一世紀末には世界平均気温が二〜四度上昇するといった驚異的なシナリオが報告された。このシナリオによれば、我が国でも降雪や積雪が減る一方で大雨や強い台風が増加するなど、異常気象の発生頻度が増えることが予測される。

次に、人口減少については、我が国の人口は二〇一〇年の約一億二八〇〇万人を頂点に減少しており、とりわけ地方の人口減少が顕著である。私の地元宇和島市においても二〇二〇年の七・三万人が三〇年後には四・三万人と四割減少するといった推計値もある。

いずれも、自然環境の影響をフルに受け、主に地方で営まれる農業には厳しい状況だ。しかし、二年前に西日本豪雨災害の被害を受けた宇和島市吉田町では若者グループが将来へ向けかんきつ園地の再編整備や請負作業を開始したように、若い農業者には「ピンチをチャンスに!」へと変える力がある。

また、宇和島市では一〇年ほど前から、温暖化を逆手に取り、イタリア原産のブラッドオレンジを産地化する取り組みが実を結んでいる。その外にも各地で都会や海外からの人材を受け入れる農業経営の確立、スマート農業による重労働の軽減や人手の省略、国内だけでなく輸出向けの農産物生産等の取り組みが進んでいる。

本校には、「興農研学」といった教育理念がある。農大では、実習等の実践教育により大地に立ち日々成長する作物の観察のなかで学び、変化に対応していく力が身につく。

こういう時にこそ、①変化する自然環境や社会に柔軟に適応し、②農業で儲け（自ら儲ける農業経営の確立）、③都会から仲間を呼び寄せ（農業の魅力を発信し農業を志す人の受け皿）、君たちの手で未来の農業・農村を切り拓いていただきたい。



# 自治会としての 一年間を振り返って

高知県立農業大学校  
園芸学科 二年 花き専攻  
学生自治会長

宮 西 善太郎



私は昨年の  
二月に支持を  
頂いて高知県  
立農業大学校  
の学生自治会

(以下自治会)の会長に就任しました。  
今季の自治会組織の活動の柱として、  
「在学生を第一に考えた自治会」を目  
標に掲げました。今回の記事を書くに  
当たって思い返してみれば、コロナで  
縮小したとはいえ大盛況だった農大祭。  
コロナで中止になったオランダ交流、  
最初は意見が合わなかった「よさこい  
祭り」、それでも一歩一歩着実に纏ま  
りつつあった結束を、中止という形で  
全て吹き飛ばしたコロナ。スポーツ大  
会に向けて日々研鑽していた四つの部  
活。…を全て無に帰したコロナ。コロ  
ナによるコロナのためのコロナの一年。  
ですが九割頭を抱える事案を引き連れ  
てくるコロナも、オンライン授業や四  
国の自治会が集結した四国農学連総会

等、例年通りでは取り組めない新たな  
試みを体験しました。校内では、中止  
になったスポーツ大会の代わりにス  
ポーツ交流会を開催しました。常に  
をしようにもコロナに阻まれる。そ  
んなことは就任当初から既に分か  
り切っていて想定をしていたとはい  
え、描いていた華麗な自治会。優雅さ  
からはかけ離れた現実の自治会。周  
期待を裏切りの形で返してしまうの  
はないかと外見では気品や端から持  
合わせていない威厳を可能な限り取  
り締めるながらも、自治会の柱となる  
余りにも足りてない時間と器。反対  
に余りあるコロナウイルス。上記の  
結果に私の心は折られかけ、不安定な  
会長だったように思います。

そんな私が自治会長として最後のラ  
ストパートナーを迎えられたのは、十  
人の自治会委員のおかげだと言いつ  
てもいい。私が言うのもなんですが、個性  
豊かな変わり者が多く、共に居て退屈  
しない愛すべき委員達。時にはぶつ  
かり合いやいざこざがありながらも、私  
にとっては良い笑い話です。皆から少  
しずつ集まった、私にとって豊かすぎ  
る愛情を浴びて折れかけた心は刃こぼ  
れも迷いもない真剣になりました。

この記事を書いている頃には、任期が

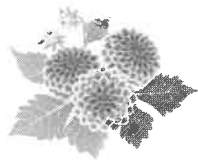
後二か月です。今高知県では、新型コ  
ロナの第三波が来ており、県の感染症  
対応の判断ステージは上から二つ目の  
特別警戒になってしまいました。最後  
の最後まで目につかないところで暗躍  
しているコロナ。このまま一年を蹂躪  
させる気はありません。計画もなにを  
するのかも定まってはいませんが、自  
治会員は各自私の想定よりも良くやっ  
てくれました。最後は私が一矢報いて  
今年度の自治会の着陸としたいと考  
えております。

来年度の自治会は私の時と違い、「去  
年の〇〇活動」というのをコロナで中  
止になったため見ていません。です  
で私とは比べものにならない労が待  
ち受けています。どんなに秀でた個が  
いても…もつと言えどどんな事も率  
先して協力し合える二〜三人がいた  
とて足りない事がほとんどだと考  
えています。そんな光景を浮かべな  
がら現自治会長から次の自治会長  
達へのアドバイス。常に委員と対  
話してください。何がなくとも  
です。私は気づくのが遅すぎ  
ました。どんな結果を呼んだのか  
を記事では語りません。だって、同  
じ轍を踏まない私の後任は知らな  
くても大丈夫だから。

最後に今年度の行事を担当していた

だいた愛媛県の自治会並びに教職員  
の方々、一年間お世話になりました。な  
にをしようにも前例の少ない事ばかり  
でその気苦労は私では計り知れませ  
ん。それを乗り越えた方達だからこそ、  
来年度の高知県に情報の共有をお願い  
します。綿密かつ精密な情報と親密な  
関係を…新たな三密でコロナの波を  
乗り越えてくれることを願っています。

追伸 ダリアの花言葉を四つほど探  
してみてください。



### 次世代型ハウスでの研修 （先進農家等留学研修を振り返って）

高知県立農業大学校  
園芸学科 二年 野菜専攻

仲本 篤 広



私は令和二年十月十九日から十一月三十日の四十三日間、パブリ

カを栽培している次世代型ハウスを経営する農協出資型法人で研修をさせていただきました。

私は農大を卒業してから次世代型ハウスで、パブリカの栽培に携わることになりました。そこでの役割は、出荷先とのやり取り、肥料の原液の作成やパートさんの労務管理など、重要な仕事がたくさんあるので、収穫や管理作業はあまりできないようです。しかし、パートさんに指示する立場なので当然管理作業もできないといけないということ、そのしんどさやどのくらいの時間でどれくらいできるかを理解しておかなければなりません。この研修では、主にパートさんと同じ内容で作業をさせていただきました。

まず収穫です。パブリカは果梗部分

が果実に付いた状態で商品となります。

ハサミや手ではきれいな状態で収穫できないので、ナイフを使って収穫します。切断面からの病気の侵入を防ぐため、ナイフの持ち手の中にはミルクが入っていて、刃の部分の間隙から垂らしながら切ります。最初の頃は刃が実に刺さり、傷つけてしまうこともあって難しかったです。研修中一日当たり最も多く取れた時は二・四t（六〇a）でした。収穫したパブリカは選果・選別をして箱詰めし、出荷します。収穫、選果・選別ともに月、水、金曜日に行います。

追い巻きはツイステイングという方法での誘引で、だいたい二節で一周になるように主枝を吊るされている誘引ひもで巻いていき、実や葉を挟んで巻かないように気を付けなければなりません。しかし、スピード重視で作業を行うため、その通りにはいかない部分も多かったです。他にも芽かき、掃き掃除、出荷用の段ボール折り、袋へのバーコード貼りやダクトの付け替えをしました。

この研修で特に勉強になったことは、作業はスピード重視で行うことです。

ゆっくりやれば丁寧にできますが、少し雑でもスピード重視でやった方が周

回する回数が多くなるので、病害虫の発生に早く気付けます。今まではついつい丁寧にやり過ぎていたこともあったので、これからはこれをしっかりと頭に入れて作業に取り組みうと思えました。

毎朝七時始まりということや何時間も同じ作業で忍耐力があるなど、しんどいこともたくさんありました。特に追い巻きという作業では早くやるというのが難しく苦労しました。しかし、これからパブリカの栽培に携わる私としては、とても良い研修になったことは間違いないと思います。いままでパブリカを触ったこともなく、もちろん作業もしたことがなかったので、作業のやり方を知り、その技術も得ることができさらに、大きなハウスの装置やシステムを見ることができたこと、現場のいろいろな人の声を聞けたことは自分にとって大きな成長に繋がりました。

この経験がすべて就職してからの糧となり、今後に活かせると考えます。この研修で得た知識と技術をもとにしてしっかり勉強し、今後ハウス全体を管理していく者としてふさわしい人間になります。

残りの学生生活では、今回の研修で

得たことを復習し、もっと詳しく勉強していきたいです。研修先で行った作業の経験は今後の仕事に活かしていきたいと思えます。



### 土佐褐牛（高知系） 繁殖の担い手になるために

高知県立農業大学校  
畜産学科 一年

上田 渉



私は、幼いころから高知県で有数の土佐褐牛の生産地である嶺北

地域の土佐町で、繁殖農家をしていた祖父母の家で飼育の手伝いをしていました。土佐町のある嶺北地域は、高知県で飼育されている肉用牛農家戸数の約三〇%がおり、土佐褐牛の主な取引

が行われる家畜市場がある、畜産業が盛んな地域です。このような環境で飼育を手伝っているなかで、土佐褐牛の可愛らしい顔立ちに惹かれたことや、高知県での飼育に適していることから、高校三年の夏に自分でも飼育しようと決意し、高知県立農業高等学校の畜産学科に入学しました。

現在は、伯父が祖父の経営を引き継いでいます。私は、将来伯父の繁殖経営を引き継ぎ、現在の母牛五〇頭から八〇頭ほどに増頭し、家族経営をしたいと考えています。私が経営を行う際は、安定的に生産するためにいくつかのことに取り組みたいと考えています。

一つ目は、IoT技術を導入し、一年一産を実現し増収を目指すことです。近年インターネット技術が発展し、様々な場面で利用される機会が増えています。そこで、私の経営でも分娩監視システムや牛群管理システムの導入をしたいと考えています。分娩監視装置は、母牛の体温を計測し、そこから出産の予知を行うことで、出産間近の母牛を観察し続ける必要がなくなり、他の作業に手を回すことができます。また、牛群管理システムは、個体管理装置を牛に取り付けることで、繁殖行

動の発見の見逃しが減り、仔牛の安定的な生産が可能になります。これらにより、自身の労働量の軽減と繁殖成績の向上につながると考えています。このような技術を利用することで、仔牛の生産を安定させ、繁殖成績を可視化させることができます。

二つ目は、循環型農業に取り組む畜連携によるコストの削減です。私が土佐褐牛を飼育した際に発生する牛糞を、堆肥にして飼料畑や耕作放棄地に施用し、飼料用作物を栽培したり、土佐町は米どころとして有名な地域があり、美しい棚田の景観などがマスコミに取り上げられています。この地域性を活かして米農家には堆肥を提供し、引き換えに稲わらを提供してもらうことで、環境にも優しくなり、牛の飼料である輸入の稲わらなどを、購入するコストが削減できるため、双方にとって利益になると考えるからです。

三つ目は、食い込みをよくする腹づくりのできた、土佐褐牛の仔牛の生産です。肥育農家が求めるのは、飼料をよく食べ、増体しやすい仔牛です。このような仔牛を生産するには、腹づくりが重要になってきます。そこで私は、現在腹づくりに関するプロジェクトで、育成期の牛体測定を行いデータの収集

をして、発育指標の検討と、出生後から始まる腹づくりのための飼育管理に取り組んでいます。良い結果が得られれば、将来このプロジェクトの結果を活用していきたいと考えています。

四つ目は、SNSを活用した土佐褐牛のPRです。具体的な内容は、私が飼育している生産の現場など、普段は目にするのができない日常の作業や、育った環境などを消費者に向けて投稿したいと考えています。土佐褐牛の枝肉の評価方法に、「トサ・ルー・ジュ・ビーフ」という高知県独自の評価基準が設けられました。これは、土佐褐牛の特徴の赤肉部分に甘みとうまみがあり、脂のキレが良くまた、喉越しの風味がよく脂身とのバランスの良さが、美味しいということに価値をつけようというものです。これらの土佐褐牛の良さを残す取り組みを、流通関係者に向けてSNSに投稿していきたいと考えています。

現在は、地元で土佐褐牛の飼育を行っている人の大半が高齢者です。そこで畜産業が盛んである地元で、私が土佐褐牛の生産をして次世代の担い手となり、土佐町を巡るツアーなどが企画された際には、私の土佐褐牛の飼育現場を見て興味を持ってもらい、実際

に食べてもらうことで味も知ってもらいたいのです。それをきっかけにまた来てもらったり、飼育してみたいと感じた人には土佐褐牛と設備を貸し出し、最終的に独立を目指す人が出てきてくれれば、後継者の確保につながり土佐褐牛の知名度の向上、土佐町の活性化に貢献できると考えています。



## 私の目指す農業

高知県立農業大学校  
園芸学科 一年 野菜専攻

東 美 来

私はいつか  
農業経営者に  
なり、生産・  
加工・販売ま  
でを一貫して

行う第六次産業型の農業法人会社を設立し農業の第一線で活躍したい。

私が住んでいる高知県四万十市は、県の西部に位置し日本最後の清流と言われている四万十川が流れ、山に囲まれ、あたりを見渡せばハウスや田んぼばかりの自然豊かな地域です。

「農業なんて給料は安いしお金儲けにならん。普通高校に行きたい。」これは中学三年生の頃の進路を決めるときに私が親と話したことです。家族から「将来安定した生活が約束されている公務員になりなさい。」と言われていました。私は、公務員や安定にこだわりはありませんでしたが、農業高校か普通科の高校しか地域がなく、この頃は農業に興味がなくマイナスイメージしかありませんでした。私自身特にやりたいことも決まっていなかったの

で、普通高校に通うことにしました。

しかし、私は高校二年生の時人間関係に悩み不登校になり、高校を中途退学しました。仕事を探し始め、十社ほど面接を受けましたが、断られてしまいました。そんな中で私の手元に残った求人が大葉農家さんのものでした。当時、人間関係に悩んでいた私にとって求人票の「家庭的な職場で」という言葉に惹かれ、「もしこの言葉が本当だったら」という期待もあり面接をお願いし、就職したことが農業との出会いでした。仕事を始めると共に、もう一度高校に行き直そうと決心し、地元にある通信制高校に通うことになり、仕事と学校を両立する日々が始まりました。

大葉農家さんでの主な仕事内容は、大葉の収穫作業でした。大葉農家さんでは一人一時間に千枚が目標とされていました。始めた当初は半分の五百枚ほどしか採れませんでした。そして、社内での平均は七百枚で決して良いとは言える成績ではありませんでした。このままではいけないと感じた私は、一緒に作業をしている方たちの作業を盗み見し試行錯誤して、気がつけば一時間千五百枚採れるほどになっていました。

大葉の収穫作業は、他の作物に比べ

職人技だと感じるほど一つ一つの動作を素早くかつ丁寧にというものでした。少しでも力の入れ具合を間違えてしまうと出荷規格外となり、廃棄処分になります。一日に廃棄処分する大葉の量を見て、「こんなにも捨てられるのか。人は贅沢な生き物なんじゃないのか。」と衝撃を受け、この時から廃棄処分される作物に、付加価値を付けることはできないのかと考え始めました。

付加価値をつける為には、加工品や消費者の方々に了承のもと通常の価格の半額にして販売をすればいいのではないかと考えました。しかし、この時の私は大葉の病害虫や管理方法が少しわかる程度で、農業に関しての知識は全くありませんでした。生産の現場しか見たことがなく、加工や物流についてどのようなルートで農家さんが作った作物が、消費者の手元に渡っているのかなどの知識をつける必要があると感じました。

その話を通じていた通信制高校の先生に相談したところ、農業大学校があると教えていただきました。農業の知識をつけるなら現場が一番良いのではないかと考えていましたが、高校の先生や親と話し合い「農業は人と交流が

少ない職業だから、農家だけより大学校に行った方が、色々な世代の人や農家さんと繋がりが持つことができるのではないかと。考え方が同じ人、違う人色々な考えを持った人に出会い様々なコミュニティを作ることができれば将来の役に立つのではないかと。と考え、高校を卒業し農業大学校を、受験することを決意しました。

大学校に入学し授業が始まり、目標のためにすべきことは何か考え、書き出して見ました。私が思い描いているのは生産・加工・販売の全てを行う会社です。廃棄処分されている作物に付加価値をつけ多様なニーズに対応していくことで生産性を上げ、今後の農業は変わっていくと考えています。

そのためには、価格帯や作物の形状などをどこまで消費者が求めていることなのかなどを理解していくことで利用形態・販売形態に応じ用途別ニーズに応えることができ、無選別などの様々な出荷・流通などのルートが増え食品ロスにつながると考えました。廃棄物の減少及び農家の収益向上が見込め、農家の活躍できる場所が増えることにより農業のマイナスイメージが減るのではないかと思います。そして、農業法人にすることにより

「農業は不安定」などのイメージをなくし担い手不足・後継者不足などの若い世代が少なくなっている現状を改善できるのではないかと思います。

これらを実現するためにも、まずは農作物についての基礎的知識を農業大  
学校で身につけ、経営も考えながら実  
習をしっかりと行っていきたいと思いま  
す。そして、独立した後のことを考え  
ながら二年間という短い大学生活を  
無駄にすることがないように、常に考  
え動き続け挑戦を必ず目標を叶えた  
と思います。



### レタスの鉄人を目指す

香川県立農業大  
学 野菜園芸コース 一年

大西 悠



「じいちゃん、俺、将来じいちゃんみたいなレタス農家になるき

ん。じいちゃんの跡は、俺がこのレタス農家継ぐきんな。」そう私がいうようになったのは、小学校四年の終わりのころでした。

私の住む香川県三豊市詫間町は、昔話の浦島伝説のある場所で、昔から庄内半島のほうでマーガレットなど、花の栽培が盛んな地域です。

そんな中、私の家では祖父の代で規模拡大し、夏に水稲、冬にレタスを栽培するようにになりました。

しかし、近年では香川県のレタス農家が減少傾向にあります。その理由に、レタス栽培でのトンネル張りが重労働であることや、管理に手間がかかるなど、現在の高齢化の進む農業の中で、レタス栽培はとて大変なものだと祖父に教えてもらいました。詫間町でも以前五軒あったレタス農家が、今では

わずか二軒だけとなってしまいました。

私の祖父は、約二十年間レタスを栽培しており、私はその祖父の背中を見て育ちました。鉄人のような祖父の姿にあこがれをいだいていたのかもしれませんが、その祖父も七十を超え、体も無理がきかなくなっています。少しでも早く跡を継ぎ、祖父に楽をさせてあげたいと、農業が学べる笠田高校に進学しました。

笠田高校では、農薬や肥料の使い方や、農機具などの基礎的な知識から、作物ごとの栽培方法などの応用的なことなどを勉強しました。

そして三年になり、有機農業というものを知りました。有機農業では、農薬や化学肥料を使用せず、防虫ネットやソルゴーなどをうまく活用して栽培管理を行います。

私は、この有機農業のことを知って、心の中で「これだあ！」と叫んでいました。

私は、課題研究でコンパニオンプランツと人手を利用した栽培方法の二つについて研究しました。結果は良好でした。コンパニオンプランツでは、ナスとインゲンと一緒に栽培すると、ナスの成長が早くなり、収穫時期が約一週間早くなりました。人手を利用した

栽培では、害虫の予防にも生長促進にも効果が見られました。

このような体験を通じて、私はもっと詳しく野菜栽培を勉強したいと思い、香川県立農業大に進学しました。

しかし、入学して約二か月、新型コロナウィルスの影響で授業の開始が遅れ、勉強することができませんでした。ようやく六月から始まった学校では、今まで見たことが無かったような機械や施設、技術について勉強することができています。

特に驚いたのがイチゴのらくちんシステムです。あんなに大きなハウスを小さな一台の装置でコントロールしているのだと知って、とても感心しました。

十月からは、農家実習でレタス部長の久保さんのお宅でレタス栽培を学ばせてもらいました。

久保さんは、県農協が推奨している栽培方法に加え、他産地で行われているトンネル張りの方法や、マルチチャーの使い比べなど、新たな挑戦をされてきました。

このように、農業大では今まで経験したことが無いことを次々と体験することができています。将来、自分が農業経営者になったとき役立てるこ

とができるよう、これからはますます積極的に知識や経験を積み重ねていきたいと考えています。そして、祖父を超えるレタスの鉄人になることを目指したいと思っています。



農大の農場でレタスの管理作業

## もつと視野を広げて

香川県立農業大学校  
野菜園芸コース 一年

籠池 良太



私は迷っています。農業大学校に入学するまで私の中で明確だった卒業後の進路が大きく揺れている

です。

私の家の窓からは周囲に広がる水田を見渡すことができ、秋には日に日に深みを増して黄金色に輝く稲穂の海原を見て育ちました。

しかし、その海原は、年々小さくなっていきます。虫が食うように、水稲さえ作付けしない水田が増えてきたのです。

六年前、高齡になった祖父の代わりに父が農業を引き継ぎました。その途端、田畑を貸しますという人や、タダでもいから使つてほしいという人が増えてきました。当時三反で始めた稲作は瞬く間に増え、今では二町八反となりました。

そんな父を支えたいと、私は農業を学べる農業高校に進学しました。そこで、専業農家の父の跡を継ぎたいと入学してきた矢野君と知り合いました。

矢野君の家は、露地野菜を中心に大規模経営を行う農業法人です。「地域の農業を絶やさずにこれからも受け継ごう」と意気投合した私たちは、将来一緒に農業をやろうと約束しました。それは、すなわち、私たちが矢野君のお父さんが経営する農業法人に就職するということでした。二人で将来の夢を語り合う中で、『今、私ができるこ

とを全力でやろう』という感情が芽生えました。

高校のプロジェクト研究では、トマトの糖度と塩分の関係について、香川県の特産品である「うどん」のゆで汁を使用して研究しました。その結果は、ゆで汁を灌水していないほうの糖度が高いという最初の想定とは違う残念な結果でしたが、そのことで、さらに野菜の成長や品質向上のしくみについてもつと深く知りたいと考えるようになりました。

また、高校在学中に農業大学校の卒業生から話を聞く機会がありました。その方は、大学卒業後、香川県で初めて有機農業を行ったよしむら農園に就職し、そこで経験したことや有機農業の魅力について話してくれました。その時、初めて農業大学校への進学を意識し、そして今、農業大学校で学んでいます。

農業大学校では、一年生の十月から十二月の三か月間、週に二日、県内の先進的な農家で実習を行っています。私は、農業大学校へ進学するきっかけとも言えるよしむら農園にお世話になっています。

実習に行く中で、吉村さんが有機農業を始めてからの努力が並大抵のこと

ではなかったことや、今でも苦労はあるけれど喜んでくれる消費者がいる限り、有機農産物を届けたいという、有機農業を続けている理由などを知ることができました。先輩の話でも強いインパクトを受けましたが、代表の吉村さんから直接聞くと、さらに理解が深まりました。

農業大学校では、この他にも先進的な農業経営者や農業関連企業などで働く方の話を聞く機会がたくさんあります。その話を聞くうちに、農業にはこれまで自分が知らなかった世界が無限に広がっていると感じました。

入学前には矢野君と一緒に農業をすることしか考えられなかった私ですが、将来の夢を実現するために、さらにもっといろんなことを知りたいと考えるようになったのです。

私の夢は、専業農家になると決めた父とともに、農業経営を行うことです。父の背中を追うのではなく、対等に肩を並べて歩んでいける共同経営者として経営に参加したいと考えています。

今の私は、まだスタートラインに立ったばかりです。もつともつと迷ってもいいので、広い視野を持ちたいと思います。そして、失敗を恐れず、どんどんトライしていきたいと思っています。





農家実習で収穫作業

### 祖父母への恩返しを夢見て

香川県立農業大学校  
農業園芸コース 一年

田 頭 梨 華



私の祖父母  
は香川県綾川  
町でブドウの  
専業農家とし  
て農業経営を  
行っています。

祖父母は、ブドウ栽培の傍ら家族の食  
べる様々な野菜を家庭菜園で作ってくれ  
ています。私は幼いころから祖父母につ  
いて畑に行き、雑草を抜いたり、定植作  
業をしたりしていました。ここで経験し  
た、植物を育てる楽しさや収穫の喜びが、  
私の農業への思いを形作り、今につな  
がっているのだと思います。

高校生になり、将来の進路を選択しな  
ければならなくなった時、それまで漠然  
と抱いていた農業への親しみやあこがれ  
が、私の中ではつきりと目標へと変わり、  
香川県立農業大学校への進学を決めまし  
た。

現在、学生生活では、教室での講義や  
週三回の農場実習、どれをとっても新鮮  
で楽しいものとなっています。

本格的な夏が始まろうとしていたころ  
のことでした。祖父が、「今年は、畑の  
ナスの出来が悪くて、実が採れんの  
や。」と言いました。畑のナスは、葉が  
何かに食べられてぼろぼろで、ともに  
収穫できるような状態ではありませんで  
した。

なぜこうなってしまったのだろう。原  
因を探し、すぐに見つけたのが、葉に付  
いたアブラムシとテントウムシによく似  
た虫です。私は、アブラムシとその天敵  
のテントウムシだと思いました。しかし、  
普段見かけるナナホシテントウとは様子  
が違います。調べてみたところ、「テン  
トウムシダマシ」という害虫であること  
がわかりました。この虫は、繁殖力が強  
いため、幼虫や卵を発見したらすぐ駆除  
する必要があることも知りました。

私は、生育不良の原因がテントウムシ  
ダマシの被害によるものであり、早めの

防除が必要であったことを祖父に伝える  
と、祖父は、「家庭菜園はできるだけ農  
薬を使わんと、作りたいんや。」と言  
いました。

祖父の気持ちを汲んで、何か方法がな  
いか考えた時、有機農業の授業で学んだ  
食酢を使う防除方法を思い出しました。

祖父のナスに効果があるかどうか、自  
信はなかったのですが、酢に少量の唐辛  
子を混ぜたものをまんべんなくスプレー  
してみました。

数週間後、畑の様子を見に行くと、ナ  
スの葉は大きくなり、実は収穫できるほ  
どの大きさになっていました。

私は、この経験を通して、病虫害の防  
除と有機農業について興味を持ちました。  
有機農業は、安全・安心な農産物として、  
普通の食品との差別化を図ることのでき  
るもので、自然環境にやさしいといった  
メリットもあります。しかし、慣行農業  
に比べ労力やコストがかかる、収穫量が  
不安定である、病虫害による被害を受け  
やすいといったデメリットもあります。

私は有機農業の持つこれらのリスクを軽  
減し、「県内で有機農業に取り組み農家  
を増やすための力になりたい」と、思う  
ようになりました。

農業大学校には、香川県農業試験場か  
ら多くの研究員の方々が講義に来てくだ

さいます。ここでは、病気への抵抗性を  
持った新品種や省力化のための農業機械、  
高品質化のための新しい栽培方法などの  
開発にも取り組んでいるそうです。

病虫害の被害を受けにくい、抵抗性  
品種を作ることや、農家を取り組みやす  
い新しい栽培方法を開発することは、有  
機栽培か普通栽培かにかかわらず、安定  
した収量や所得の確保につながると思  
います。

今、私は、香川県職員として農業試験  
場で働くことを目標に大学校生活を送っ  
ています。そして、香川県の農業を支え  
る仕事で頑張ることで、農業への夢を与  
えてくれた祖父母に恩返しをしたいと  
思っています。



農大のハウスでイチゴの収穫作業

# 花の六次産業化で 消費者との交流を

香川県立農業大学校  
花き園芸コース 一年

上 原 華菜美



私は、農業  
大学校に入学  
し実際に農業  
を学び触れる  
まで「農業」

がどういものかわかりませんでした。  
正確に言う十八年間生きてきた中で、  
深く考えたことが無かったです。

農業大学校で最初に受けた「農業基  
礎」の授業で、「農業」とは常に私た  
ちの身近にあり切っても切れない存在  
なのだ確信しました。

また、この農業大学校にも「野菜園  
芸」「花き園芸」「果樹園芸」「造園緑  
化」「畜産」と五つのコースがあるよ  
うに、「農業」と一言で言ってもその  
内容は幅広いものがあることがわかり  
ました。

日々の美味しいごはんやエントラ  
ンに飾られた美しい花、街角の緑など、  
目を向ければありふれている農業への  
ヒント。しかし、一般の方が興味を持  
つのはそこまでではないでしょうか。

これまでは、私がそうだったように、

例えば、「美味しいごはん」なら素材  
を育てた人より調理の仕方や調理をし  
た人に目を向けてしまいがちだからで  
す。美味しいものを食べれば、作り方  
が気になるし、きれいに盛り付けられ  
た料理は写真を撮り、SNSに載せて  
います。しかし、使われている材料の  
一つ一つを「誰が育てたのか」とはな  
かなか考えることはないのでしょ。投  
稿されているSNSを見て、農家自  
身が発信者になっている投稿は見かけ  
ても、第三者が生産者をピックアップ  
して発信していることはほとんど見か  
けません。

育てた側としても、一度手を離れて  
しまえばその後がどうなったのかを知  
るすべがありません。しかし、料理を  
作った人となればどうでしょうか。数  
多くの料理人が雑誌やTV、SNS等  
で取り上げられ、活躍している様子が  
目に浮かぶと思います。もちろん、料  
理人が努力をした結果だということば  
いうまでもありません。ただ、消費者  
との距離が農業より近く、その点が有  
利だと思います。

私は、幅広い人へ農業とは何かを伝  
えると同時に、消費者と生産者がつな  
がる方法を考えていきたいと思いまし

た。

そのような時、六次産業化について  
教わる機会があり、とても興味を持ち  
ました。現在、花き園芸コースの実習  
で花を育てて出荷しています。しかし、  
市場へ向けて出荷したらそこで終わり。  
次の花の生産に取り掛かります。その  
後、それらの花を買ってくれた人がど  
んな感想を持ってくれたのかも全く分  
かりません。ですが、もし、自分が仕  
立てた花を採やハーバリウム、ドライ  
フラワー等に加工して商品として売り  
出すことができたなら・・・と考えた  
とき、とてもワクワクしました。

それに伴う手間や費用、技術や知識  
が必要となりますが、もし自分が作っ  
たものを直接消費者の手に届けること  
ができ、喜んでくれたら、それは何物  
にも代え難い喜びとなるでしょう。

生産者と消費者の距離が近くなり交  
流することができたら、農業をより一  
層大切に感じてもらえると思います。  
今では、自分の作品を手軽に販売する  
ことのできるサイトやアプリがありま  
す。しかし、直接販売にも多くの課題  
があります。どうすれば六次産業化を  
活用して消費者とうまくつながること  
ができるのが、これからの私の課題  
の一つになりました。

長期間にわたり悩まされているコロ  
ナ禍の現代で、負けずと変化していく  
社会に順応することも大事ですが、自  
分たちにできることを考え、行動に移  
していくことが新たな一歩になると私  
は信じています。



農大のハウスで切り花の収穫作業



### 農業大学校での二年間

徳島県立農林水産総合技術支援センター  
農業大学校

6次産業ビジネスコース 二年  
学生自治会長

那 須 沙 希

私が農業大学校に入學した理由は、祖父母がしている農業の手伝いがしたかったからです。小さい頃から農業の手伝いはしていました。普通科の私が農業という道に進むのは勇気があることでした。不安を抱えながらの入學でしたが、友達もでき安心したことを覚えていきます。

農業大学校には、「学生自治会」と「模擬会社」そらそうじゃ」という二つの組織があります。はじめはどちらかの役員になりたいと考えていました。自治会を選んだ理由は、学校活動を支える重要な役割を担っていると思ったからです。

一年の時は自治会会計を担当しました。一番大変だったのは農大祭の会計の作業です。何度数え直しても金額が合わず何度も計算し直したのを今でも覚えています。私が一年の時は、徳島県が四国農学連の担当校だったこともあり、スポーツ大会や、意見発表会の準備をしたのもいい思い出です。

二年になり、自治会会長として去年ほどではないにしろ、忙しくなると思っていました。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、数々のイベントを中止せざるを得なくなりました。毎年実施している新入生歓迎会は、例年であればバーベキューをしていましたが、今年は飲食を無くしたクイズ大会になりました。また、農大祭も新型コロナウイルスの影響により、例年のように一般のお客様を迎えての開催は難しく、農大関係者だけの校内文化祭を開催しました。

他にも四国農学連スポーツ大会が中止になったほか、中国四国プロジェクト発表会などがリモートで行われました。そういったイベントは他校の農大生との交流の場になっていたため、リモート開催はとても残念に思いました。他校との交流が無理でも、校内で交流の場を持ちたいと考え、スポーツ大会の代替イベントとして、学生自治会主導で、校内球技大会を開催しました。

自治会関係以外にも影響があり、模擬会社そらそうじゃでは、校外販売研修が去年よりも少なく、学校で行われる販売研修『きのべ市』も今年度は開催できませんでした。

そこで、販売方法を見直し、メイン商品である農大アイスを通販で販売することを模索した結果、「瀬戸内ブランド」の認定を受け、「(株)島と暮らす」が運営するサイトで「農大お米のアイスセット」が販売されるなど、新しい販路を開拓し、今後に繋がる大きな一歩になりました。

一方で今年度の一年生は販売研修の経験が少なく、来年度以降販売活動を行うっていくためには、経験不足を補うためにきちんとした引継ぎが必要になると思っています。

自治会も同様で、自分たちもイベント経験が不足している状況ではあります。ですが、昨年先輩方から引き継いできたこと、自分たちがコロナ禍で経験したことを、来年度の二年生へしっかりと引継いでいくことが重要になってくると思います。

今年度は新型コロナウイルスの影響が大きい一年になりましたが、そういった状況下において、自治会では、イベント内容の刷新や新たなイベントの形を模索することにつながり、そらそうじゃでは、販売方法や商品について見直す一つの好機ともなりました。来年度は以前のように学校行事ができ、販売研修や他校の農大の方々と交流で

きる充実した一年になればと願っています。



# 徳島農大そらそうじや の社長として

徳島県立農林水産総合技術支援センター  
農業大学校  
農業生産技術コース 二年

梶田 光輝



私は、高校時代に林業を学び、農林業の分野に興味を持つようになったことがきっかけで徳島県立農業大学校へと進学しました。農業と言え

ば、作物を栽培し収穫出荷する、というのが基本にありますが、農業大学校に進学して「六次産業」分野への興味が深まり、自分たちの生産した野菜や果物を加工し、素材の良さを引き出した加工品の製造に魅力を感じるようになりました。

さて、私が通っている徳島農大には、「模擬会社徳島農大そらそうじや」というものがあります。校内での準定期産直市「きのべ市」や常設の直売所「ロビー販売」、校外での販売研修である「出張きのべ市」など、県内外で積極的に販売活動を行ってきました。また、魅力的な商品の開発、お客様を

引き寄せられるような商品ディスプレイ、接客方法など、学生が主体となって話し合いを重ね、より充実した活動内容を目指してきました。昨年の三月、私は、徳島農大そらそうじやの代表取締役社長という立場を先輩方から引き継ぎ、一年間活動を行うこととなりました。

私が社長を引き継いだ時には、新型コロナウイルスが日本各地で猛威をふるい始めた時期と重なっており、私たちの日々の生活も自由を奪われるといった状況になりました。「そらそうじやの活動も満足に行えないのではなかいか。」といったことを危惧したところ、今年には新型コロナウイルスの影響であまり販売研修に行くことができず、そらそうじやの代表として、「数少ない販売研修でどのようにすれば売り上げが上がるか」を真剣に考え抜いた一年でした。

販売研修が行えない、農大祭なども中止になる、そんな状況の中で「ものを売る」ためにどうすればいいのかが、先生たちのアドバイスを受けながら社員の皆と話し合い、新しい加工品の開発や新型コロナウイルス感染対策をしっかりと行った販売活動を実施しました。

新しい加工品として、農大産加工品

の詰め合わせ農大ギフトセットや高単価が期待できる農大産はちみつ「農大百花蜜」、藍のせっけんなど、これまでとは違う趣向の商品を開発、販売しました。また、インターネット販売の道を模索し、「農大お米のアイスセット」が「瀬戸内ブランド」の認定を受け、「(株)島と暮らす」が運営するサイトでの販売が開始されました。「農大百花蜜」は、平成二十五年に農業大学校が新校舎へ移転して以来の再販売となりましたが、販売研修において反響が大きく、来年度以降も継続的な販売が期待できました。

本来であれば、お客様とコミュニケーションを図りながら、「ものを売る技術」を磨く経験がもつてきた、という思いもありますが、この一年を振り返ってみると、今年のようなコロナ禍の状況であったからこそ、前例踏襲ではなく、知恵をしばって考え、新しい経験ができたのではないかと思います。時代の変化に対応できる企業を作るといことが、社員一丸となればできるという希望を感じることができました。一方で、代表として至らぬところも多々あり、社員の皆に迷惑をかけたこともありましたが、社員の皆で力を合わせて活動できたことは何より

も貴重な経験だったと思っています。自分たち学生もこれから社会人として一歩を踏み出しますが、今回のこの経験を必ず自分たちの将来につなげていきたいと思っています。



## 辻岡農園二十四代目 としての覚悟

徳島県立農林水産総合技術支援センター  
農業大学校  
農業生産技術コース 一年

辻岡 拓馬



「徳島で一番品質の高いスタチを育てたい」私は辻岡農園二十四

代目として、この覚悟を胸に農業大学校へと進学しました。

私とスタチの初めての出会いは幼少期で、スタチの収穫をする祖父に一つ食べさせてもらったときのことです。「ミカンのように甘いのかな」と思っていた私は、あまりの酸っぱさに思わず吹き出してしまいました。その出会いがトラウマとなり、スタチを見るのも嫌な時期もありました。

しかし、成長する中でスタチはそのまま食べるのではなく、その爽やかな風味で食材の味を引き立てる最高の調味料であることに気が付き、私はスタチの虜になりました。

私の住む徳島県はスタチの全国シェア約九十八%を誇る代表的な産地です。

私の実家もスタチを育てており、ハウスタチ二十aと露地スタチ十五aを栽培していますが、我が家の経営をさらに発展させるためには、解決しなければいけない課題があると私は考えています。

一番の課題は「経営規模の拡大」です。一言に経営規模の拡大と言っても様々なものがありますが、私はその中から二つ採用したいと考えています。

一つ目は、労働力の拡大です。現在我が家は祖母と父、私の三人で作業をしています。しかし、現状のままでは労働力が足りず近い将来に規模を縮小しなければいけない事態に陥ります。そこで労働力を拡大することで、栽培面積や品種、事業の拡大など多くの可能性が見えてきます。そのため家族経営を脱却し、雇用を行うことで労働力不足を解決する必要があると私は考えています。

二つ目は、農地面積の拡大です。農地面積を拡大することは、大量に生産することや安定した取引先を手に入れることや出荷先を増やせることでリスクの分散に繋がります。そして、面積拡大のためには、労働力の確保とともに機械化を進めることが必要になります。

機械化を進めることにより、栽培面

積の拡大や生産の効率化が可能になることに加え、作業をデータ化することで管理がしやすくなり、農業への新規参入を容易にするので、現場の若返りに貢献することが予想されます。

また、農地面積の拡大により肥料や農薬などの消費量が多くなれば割安で購入できるといった先例があるため、生産コストの削減が見込めます。これらことから私は農地面積の拡大を進めるべきだと考えています。

次の課題は安全性の確保と高品質化です。安全性の確保は仕事をする上で最優先のことだと思えます。そのためにGAPの導入をしたいと考えています。これを取り入れることにより、安全性の確保だけではなく競争力の強化や品質の向上、作業の効率化や経営の改善などの多くの効果を期待できます。

農場内においても危険性の評価や危険物の取り扱い方法を明確にし使用履歴を記録するため、従業員の安全確保や肥料や農薬の過剰購入による在庫過多、過剰に消費することを事前に予防することが可能になります。これらのことから私は、GAPを導入する必要があると考えています。

私は大学で「より高品質で安定した生産が可能になる技術」についての研

究を行いたいと考えています。課題は葉果比と貯蔵技術についてです。葉果比を研究することで、高品質果実を安定して生産すること、次の年に繋げる農業を実践できることを知り、研究を行いたいと考えました。

また、貯蔵技術についての研究を行うことで、今まで閑散期であった時期にも出荷できるようになり、一年を通しての出荷が可能になることで、収入と経営の安定化を図りたいと考えています。

私はまだ大学一年生。これらの課題を解決するには、技術も経験も足りません。今後は、教えられたことだけをするのではなく、放課後実習やイン



ターニングを活用し自主的に学びを深め、在学中に様々な知識や技術を身につけ、農業について少しでも多くのことを学んでいくことが今の私に出来ることだと考えています。卒業後は大規模農業を行っている農業法人に就職し、多くのノウハウを学び、実家の農業に活かしていきたいと考えています。私は辻岡農園二十四代目として誇りをもって徳島名産のスタチ生産を引き継いでいきたいです。

### 農業を志して

徳島県立農林水産総合技術支援センター  
農業大学校  
6次産業ビジネスコース 一年

### 谷口晋作



私の祖父は農家でしたが、幼い頃は農業に興味を持っていませんでした。

そんな中、中学校に進学すると、技術部に入部しました。ロボット作りに惹かれて入った部でしたが、そこで私の目を最も引いたのは、イチゴのビニールハウス栽培でした。機械によって室

温を管理し、プログラムによって定期的にポンプで水やりをするものです。工業が、農業を助けるシステムでした。高校は半年で退学しました。何もやることなく、祖父の農業を手伝いに行くようになりました。そこで痛感したのは、いかに農業が重労働であり、儲からないかということでした。

手作業で芋を掘りながら考えることは、どうすればこの作業を楽にできるかということだけでした。芋掘り機を開発・導入できないだろうか。せめてこの芋が利益にならないだろうか。機械等によって省力化できれば、農業の規模を大きくすることもできます。土地が余り放題のこの田舎なら、農業だけが生活ができるかもしれません。

祖父の農地を継ぎたいという夢と、農業だけで生活していきたいという夢が固まったのは、この頃でした。

その思いを胸に、二十歳を超えてから、農業大学校へ行くことにしました。そこで学んだことは、これまで私が農業に携わりながら感じていた課題を解決するためのヒントになるものでした。イチゴのビニールハウス栽培は現在のスマート農業の基礎となるものでした。プログラムによる自動の水やりは、IoTの技術と組み合わせると、例えば

土中の水分量計と連携させればより適切なものになります。今まで抱いていた、「二次産業と三次産業は一次産業を支えることができる」という考えが、確信に変わりました。

スマート農業について学び、祖父の農地に持ち込みたい。省力化は規模の拡大につながり、規模の拡大は雇用の発生に繋がります。そうすると、農業だけで生活ができる、農業法人ができるかもしれません。

祖父の農地を法人化し、農業だけで生活をする。さらに具体的な夢が、農業大学校にきて見つかりました。

私は、四年制大学への進学を目指しています。一次産業と二次産業が結びついた、農工連携についてより深く学ぶためです。農業大学校では、農業機械の需要を見極めるために、現場の作業を学んでいるところです。農業の機械化による作業の負担軽減は、新規就農者の増加と、農業の大規模化が見込めます。将来的には、農業機械を開発する企業に就職し、二次産業の分野から、この国の一次産業を支えたいと考えています。

農業大学校で、スマート農業の導入試験に関する会議を見学させてもらう機会がありました。水田の水位・水温

のモニタリングや、自動給水。ドローンによる農薬散布や、アシスト付きトラクターによる耕うん。そのいずれも試験において一定の結果を出していました。実際に使った農家の方も、「一度使うと従来の作業には戻れない」と仰っていました。将来開発に携わりたい、あるいは祖父の遺した農地に導入したい開発中の技術は、たくさんあります。ゆくゆくはそれらを祖父の農地に導入し、省力化を図り、人を雇用し、規模を広げ、農業だけで食べていける法人にしたいと考えています。

農業大学校で、そういった知識や経験、目標を積み上げる道中に、今私はいます。



### 卒業後の進路について

愛媛県立農業大学校  
総合農学科 二年 農産園芸コース

池田 聖良



私は農業大  
学校卒業後、  
種苗会社に就  
職します。  
きっかけは、

農業大実習で得た経験を通して、  
農家が育てる作物の苗に直接携わるこ  
とのできる仕事に就きたいと考えるよ  
うになったことです。

中学時代から家庭菜園で花の世話を  
していました。特段、小さな頃から  
植物に興味があったわけではありませ  
ん。大きな転機があったのは高校時代  
です。科目選択で何気なく花卉を専攻  
した私でしたが、思いのほか花卉の持  
つ「心を和ませる魅力」に惹かれ、農  
業分野に強い興味を持つようになりま  
した。農業大学校では、迷わず花卉を  
専攻し、花卉類の栽培実習に積極的に  
取り組みました。花卉類の利用面につ  
いても体験しながら深く学ぶことがで  
き、良い経験になったと感じています。  
将来就く仕事を決める転機となった  
要因の一つが、農家での体験実習です。

毎日欠かさず圃場で作業を行い、管理  
していくことは生半可なことではあり  
ません。農家の日々の苦勞を自分なり  
に、改めて感じることができました。

また、その農家で出会った種苗会社  
の方とお話する機会もあり、「農家を  
支える」ことで地域に貢献したいと考  
えるようになりました。作物を栽培す  
るだけでなく、良質な苗を供給し流通  
させることもまた、農業の発展に寄与  
する方法だと知りました。

私は種苗会社に就職して、今まで高  
校や農業大実習で学んできた、  
作物の性質や栽培管理方法を活かせる  
ように仕事をしていきたいです。その  
中で、野菜や花卉類について知識を深  
め、農作物流通の一端を担う者として  
精いつばい頑張ります。そしていつか、  
農家に頼られるような頼もしい人材に  
なりたいです。

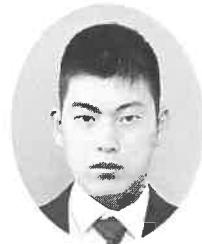


花き収穫実習

### 農業とやりたいことを考える。

愛媛県立農業大学校  
総合農学科 一年 果樹コース

新 明 都



私は、農業  
大実習でより  
専門的な農業  
の知識や経営  
方法を学び、

実家の農業を継いで、より稼げるもの  
にしていきたいと考えています。どの  
ようにしていきたいかは、具体的には決め  
ていませんが、農業大実習での実習や  
授業を通じて見つけたかと思っていま  
す。

高校では果樹を専攻し、栽培の基礎  
や品種について学びました。農業大実  
習でも果樹コースを選択しましたが、  
植物生理や育種等、今まで知らなかつ  
た分野も幅広く学べ、実習でも草刈り  
や防除、果樹の栽培管理等、より実践  
的に学ぶことができています。高校時  
の課題研究で、柑橘へ海水を葉面散布  
することによる品質向上と梨のクリビ  
オ(微生物資材)散布による品質向上  
の二つの試験をしましたが、この結果  
や過程について、さらに詳しく調べる  
ことのできる知識も得たいと考えてい

ます。

また、毎週水曜日に開催する農大市  
(直売)では、大勢のお客様と交流す  
ることができています。私は、人と関  
わることは人生の重要な財産に成り得  
ると考えているので、この貴重な体験  
を無駄にしないように意識しています。

しかし現在、新型コロナウイルスに  
より簡単に交流することが難しくなっ  
ています。愛媛県においても多くの感  
染者がでており、外出自粛が要請され  
た時期もありました。

コロナは農業分野にも大きな影響を  
もたらしており、学校の入学式や卒業  
式の中止や休校、各種イベントの中止  
により、切り花の需要の減少や給食用  
生鮮食品の需要が無くなり、関係農家  
の収益が減少しました。

また、消費者の農作物の購入方法も  
変化しており、外出自粛に伴い、ネッ  
ト通販やネットスーパーを利用する等、  
今まで主流であった市場出荷、店頭販  
売といった流通が変わって行くのでは  
と感じます。

さらに、外国人労働者やアルバイト  
の受け入れができず、労働力不足が問  
題となった地域もありました。高齢化  
や農業就業者人口の減少に伴う労働力  
不足は大きな問題で、農業機械の導入



果樹実習（ハウス内張設置）

により省力化を図る必要がありますが、柑橘ではせん定、摘果、収穫の作業の機械化は難しいため、防除作業やかん水作業の機械化・自動化や園地整備や園内作業道の整備等、柑橘で導入可能な対策を学びたいと考えています。

私の夢は、実家の農地を受け継ぎ、「愛媛果試第28号」や「甘平」のような高価格で販売できる品種の面積を増やし、収益を増やすことです。しかし、今の経営を急に変えることはできないので、園地の土壌性や気象の影響を考え、経営試算し、慎重に考えたいと思います。

今の私では、知識・経験が不足していますが、少しでも補えるように日々努力したいと思っています。

### 地元を守っていくために

愛媛県立農業大学校  
総合農学科 一年 果樹コース

柳 澤 大河



私の出身地の愛媛県八幡浜市真穴は、「真穴みかん」のブランド

ドで知られる全国でも有数の温州みかんの産地です。現在、約一八〇戸の農家が年間七〇〇〇〜八〇〇〇トンのみかんを生産し、国内屈指のみかん産地としての信用を得ています。

宇和海に面しているため温暖な地域で古くから温州みかんが栽培されていました。温州みかんの栽培に適していることに加え、先人の方々が栽培技術を高めるとともに協力し、私の故郷の「真穴みかん」のブランドを育て上げました。

これから私たち若い世代が引き継ぎ、発展させる必要があると考えており、将来実現させたい計画があります。

一つ目は、大島クルージングとコラボしたみかん狩りです。消費者のみかんだのような場所・環境で育っているのかを知っていただくとともに、大

島での一周のサイクリングや、島の特産物を味わい、地元の良さをさらに知っていただき、この土地を気に入って移住を考えるような人が増えてくれればと考えています。

二つ目は、六次産業化です。私の代では加工品を作り付加価値を加えることで利益を上げたいと考えています。また加工工場は、八幡浜市内に作ることでより我が家の収穫物だけでなく、周りの農家の柑橘も加工することにより年中農家の収入があるようにしていきたいと思っています。

三つ目は、海外販売です。愛媛のみかんは全国的にも有名だと思います。しかし、海外には浸透していないと思います。おいしいみかんを世界中の方に知ってもらいたいと思いますが、海外への農産物輸出は厳しい関門があります。病害虫と使用農薬は、相手国の検疫や農薬の使用基準等に注意する必要があります。関係者に相談しながら厳密な管理をする必要があるようです。海外を相手に考えるならグローバルGAP取得も必須条件になると思います。難しいハードルをクリアし、海外販売という新たな分野の開拓を考えています。

この三つを実現させるために農業大

学校で学びたいことがあります。

まず、柑橘栽培の基礎です。おいしいみかんを世界中に広めるには前提として、自分がおいしいみかんを作る必要があります。そのために剪定や摘果について授業、実習で学んでいきたいと思っています。次に、多くの人とコミュニケーションをとり社交性を身に着けたと考えています。将来実現させたいコラボも六次産業化も柑橘栽培もすべて人のつながりや、情報収集が大切です。既存の六次産業化の実例を参考にしながら、改良を加えより良いものにしたと考えています。最後に、地元の観光や伝統文化資源を有効活用できる手段はないのかを模索していきたいと思っています。また、私が稼げる農業の見本となり地域活性化や後継者問題を解決していけたらと思っています。



農大果樹ハウスでの実習